

# 「〇〇で検索」のデ格における位置付け

安 祥希

## 要 旨

本稿では、「〇〇で検索」におけるデについて考察を行い、そのデ格の用法内における位置付けについて検討した。「〇〇で検索」におけるデは引用助詞トと置き換えられるという他のデにはない特徴を持つが、これは「検索(する)」などが表す動作が及ぶ範囲を限定する条件が「文字列」である場合にトとの置き換えが可能となるだけのことであり、このタイプのデは「条件による範囲の限定」を行うものとして従来の研究が言うところの「範囲のデ」の中に位置付けられるということを主張した。

## キーワード

デ格 引用助詞ト 範囲のデ 条件による範囲の限定

## 1 はじめに

本稿が分析の出発点とするのは、「検索(する)」と共起するデである<sup>1</sup>。

- (1) 株式会社アイシェアは 29 日、テレビ CM での「〇〇〇で検索」といった、検索窓の表示手法に関する調査結果を公表した。

(<https://www.startrise.jp/articles/view/2404>)

- (2) 名刺の裏に「華麗に集客で検索」と入れてありますし、お会いした人にも口頭で「華麗に集客で検索してください」とお伝えできるものです。

(<https://masudamegumi.com/searchonlyone/>)

このデの特徴は、引用助詞トと置き換えることができるという点である。

- (3) 「詳しくは〇〇と検索してください」などの手法で検索窓を表示するテレビ CM は、検索窓を表示しないテレビ CM と比較して、広告対象商品に関する検索件数が平均 2.4 倍増えることがわかった。

(<https://internet.watch.impress.co.jp/cda/news/2007/10/10/17130.html>)

- (4) 例えば、iphone と android のどちらかが含まれるツイートを同時に調べたい場合、「iphone OR android」と検索することで、意図した通りの検索結果が表示されま

---

<sup>1</sup> 出典を示した用例への強調は筆者によるものである。なお、本稿ではインターネット上で得た用例を複数示しているが、最終閲覧日はいずれも 2020 年 11 月 5 日である。

す。 ([https://prebell.so-net.ne.jp/tips/pre\\_19041701.html](https://prebell.so-net.ne.jp/tips/pre_19041701.html))

デ格に関する研究には、2 節で触れるように、多くの蓄積があるが、この引用助詞トと置き換え可能なデを取り上げた研究は、管見の限り、見られない。また、例えば(2)は「華麗に集客」ということばにデが後接していると捉えられるが、これをもってデにトと同じ「引用」という用法を認めるかも問題となる。

以上を踏まえ本稿では、「検索(する)」と共起し、かつ、引用助詞トと置き換えできるデ(以下、便宜的に「〇〇で検索のデ」とする)を他のデの用法と比較する。比較の対象とする具体的なデは、以下のようなものである((5)は従来の研究が「手段のデ」と呼ぶもの)。なお、これらは「検索(する)」と共起はするが、本稿が意図する意味を維持したままの形で引用助詞トと置き換えることはできない。

(5) 携帯 {で/\*と} 検索する。

(6) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」 {で/\*と} 検索する。

そして、「〇〇で検索のデ」は、(6)のようなデとともに、「条件を設定して範囲を限定するデ」として、従来の研究が言う「範囲のデ」の中に位置付けられることを主張する。

以下、2 節では、デ格を包括的に扱っている研究の概観を通して、「〇〇で検索のデ」の位置付けを考える際には、引用助詞トとの置き換え以外の観点が必要なことを確認する。3 節では、同一文内におけるデ格の重複と言う観点で「〇〇で検索のデ」と「手段」のデとを比較して、両者は同じデとは捉えられないということを指摘し、4 節で「〇〇で検索のデ」が「条件による範囲の限定」を行うものとして従来の研究が言うところの「範囲のデ」の中に位置付けられることを主張する。そして、5 節にて本稿での議論を踏まえたデ格の暫定的な体系について論じ、6 節にてまとめと今後の課題を述べる。

## 2 先行研究

本稿で取り上げている「〇〇で検索のデ」については、述部が「検索(する)」(および「検索(する)」の意味で用いられる「調べる」)に限られるように思われる。デ格に関する従来の研究でこの「〇〇で検索のデ」を取り上げている研究は管見の限り存在しないため、本節では、分析の足掛かりとして、「検索(する)」と共起したデがどのように扱われているかという観点から先行研究を概観していく<sup>2</sup>。

デ格の研究には、菅井(1997)、森山(2004, 2008)、岡(2005, 2013)、森山・冉(2008)、日本

<sup>2</sup> 「調べる」の場合、「〇〇と調べてください」は問題ないが、「〇〇と調べる」はデに比べて許容度が落ちるように思われるため、ここでは「検索(する)」に限定して確認をしていく。なお、「調べる」と共起したデについては、「警察 {で/が} 調べたところ嘘だと分かった。(菅井 1997)」のような「動作主」と呼ばれるものがほとんどである。

語記述文法研究会(編)(2009)、丸山(2015, 2016)、盤若(2015)、石川(2017)、芦野・伊藤(2019)など、その用法を包括的に扱ったものに限っても多くの蓄積がある。しかし、この中で「検索(する)」と共起したデの用例を挙げているのは、石川(2017)と盤若(2015)のみである。

まず、石川(2017)による意味役割のカテゴリー体系を以下に引用する。なお、表 1 用例欄の括弧書きは石川(2017)による分類作業の基準である。

表 1 石川(2017) による意味役割のカテゴリー体系(用例は一部抜粋)

上位カテゴリー	下位カテゴリー	用例
A. 時空間系	1. 場所 R	神戸で遊んだ／その本で述べた
	2. 場所 C	大事な所で失敗した／大会で優勝する／ネット(上)で検索する
	3. 場所 T	夕食の後に彼に会う(※時間軸上の点)
B. 手段系	4. 手段 R	飛行機で東京に行く／水で酒を割る／ペンで描く
	5. 手段 C	話し合いで解決する／ニュースで知る／2 で 10 を割る
	6. 要素 R	この財布は皮でできている／壁は落書きでいっぱいだ (※先行研究で言う「材料」「付着物」等はここに含まれる)
	7. 要素 C	この社会は思いやりで成り立っている
C. 因果系	8. 理由	雨で中止になる／厳しい練習(のおかげ)で優勝できた
	9. 根拠	成績でクラス分けする(※判断の手掛かりや基準を含意)
	10. 目的	仕事で来日した／金目当てで近づいた
D. 付帯状況系	11. 様態	笑顔で働く／駆け足で去る／独身で生きる／1人でやる
	12. 言語	英語で話す／フランス語で本を出す
	13. 様式	新しい方式で実施する／十進法で表現する
	14. 主体	片づけはそちら[君ら(の方)]でやっておいて (※「自分で」は後続動詞の意図性により 11 または 14 に分類)
	15. 主体数	3人で話す／20か国で協議する(※「1人でやる」は 11)
	16. 資格	教師役で出演する／先発メンバーで登録される(※「～として」)
E. 範囲系	17. 範囲 RC	日本で最大の湖／全部で 1 万円(※母集合を設定・表示する)
	18. 範囲 T	収益は 3 年で 100 万円になった／10 年で成長した
	19. 観点	GDP で 1 位になる(※「～において」「～の点で」「～に関して」)
	20. 期限 RC	これで完成だ
	21. 期限 T	今日で仕事は終わりだ／6 時で閉める
	22. 比較	彼と彼女で強いのはどちらですか
F. 対比系	23. 累加	議論した上で決断する／医師で登山家の山田(※「かつ」「さらに」)
	24. 譲歩	肉は高いので魚でいい(※話者の許容を含意)

※Rは実体物、Cは観念物、Tは時間

石川(2017)は、従来のデ格に関する研究による意味役割の分類の多くは少数の用例の質的検証に基づくものであり、量的なアプローチによる研究は少ないということを指摘する。そして、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から抽出した 700 例の用例をデータに、「辞書や教材、また、各種の先行研究で言及された要素を幅広く取り込み、意味役割のカテゴリ体系を新規に設定した (p.103)」として、上記の表 1 を示している。

本稿の問題意識に立った場合、表 1 からは以下の 2 点を指摘することができる。

- I. 豊富な用例に基づく分類であるが、「○○で検索のデ」は見られない
- II. 「ネット(上)で検索する」が「場所 C」に位置付けられている。

「ネット(上)で」は、確かに、「検索する」という行為を行う抽象的な空間(場所 C)と捉えることができるが、その解釈に確定できるのは「ネット上で」の場合であり、単に「ネットで」と言った場合は「手段 C」とも解釈できるように思われる。

盤若(2015)は、先行研究、辞書、日本語教育教材におけるデの用法分類を調査・検討した研究であり、「〈方法〉〈道具〉におけるデとヲの比較」として次の例が挙げられている。

- (7)a. 携帯を調べる
- b. 携帯で調べる
- (8)a. 携帯を検索している
- b. 携帯で検索している (盤若 2015:224)

(7b)(8b)はどちらも従来の研究が「手段のデ」(もしくは「道具のデ」と呼んできたものである。

先行研究では、「検索(する)」と共起した以上のようなデの用例が取り上げられているが、これらは従来の研究が「場所のデ」「手段のデ」とするものである。このほかにも、表 1 の用語で言えば、「様態」(=「1 人で検索する」)、「主体数」(=「3 人で検索する」)、「範囲 T」(=「3 分で検索する」)などのデが、「検索(する)」と共起できると考えられるが、「○○で検索のデ」の特徴である引用助詞トと置き換え可能という点を考慮に入れた場合、「○○で検索のデ」とこれらのデを同じものと考えことは難しい。しかしその一方で、「○○で検索のデ」の引用助詞トと置き換え可能という特徴は、このデが持つ 1 つの側面を表しているにすぎず、デ格の用法分類上は本質的な特徴ではないという可能性もある。

この問題を解決するために、次節以降では、引用助詞トとの置き換え可否とは異なる観点から分析を行っていく。具体的には本節で見たデの中で、「○○で検索のデ」と意味的に最も近いと思われる「手段のデ」を比較対象に、同一文内における重複という側面から考察していく。

### 3. 「〇〇で検索のデ」と「手段のデ」との比較

孟(2014)は、同一文内におけるデ格の重複(二重デ格構文)に関する分析には研究者の内省の揺れが見られることを指摘している。(9)は杉本(2013)が、(10)は矢澤(2007)がそれぞれ「原因のデ」と「手段のデ」の重複として挙げた例である。

(9)\* 列車事故でバスで振り替え輸送を行った。 (杉本 2013)

(10) 鉄道ストでバスで登校した。 (矢澤 2007)

そして、デ格を「空間次元のデ格」「モノ・コト次元のデ格」「属性次元のデ格」に分けたうえで、コーパスから得た用例の分析、ならびに、母語話者に対する許容度判定のアンケート調査の結果に基づき、デ格の重複が許容される条件を記述している。次節以降の議論とも深く関連するため、多少長くなるが以下に孟(2014)の議論を引用する。

まず、孟(2014)によるデ格の 3 分類と石川(2017)の分類(=表 1)の対応をまとめたものを示す。

- ・空間次元のデ格(事態成立の基盤のデ格)<sup>3</sup>
  - <場所>、<時間>、<状況> → 石川(2017)における「A. 時空間系」
  - <範囲>、<期間>、<限定>( <場所>、<時間>からの派生、二次的用法)
    - 石川(2017)における「E. 範囲系」
  - <動作主> → 石川(2017)に立項なし
- ・モノ・コト次元のデ格(事態成立の媒介物のデ格)
  - <原因>、<道具>、<手段>、<方式>、<材料>
  - <目的>、<構成要素/内容物>( <原因>、<材料>からの派生、二次的用法)
    - 石川(2017)における「B. 手段系」「C. 因果系」
- ・属性次元のデ格(事態成立のサマを規定するデ格)
  - <様態>
  - <資格>( <様態>の二次的用法)
    - 石川(2017)における「D. 付帯状況系」

次に、孟(2014)における結論の概要と関連する用例をまとめたものを以下に示す。なお、用例については、見やすさを考慮し、空間次元のデ格には実線を、モノ・コト次元のデ格

---

<sup>3</sup> 孟(2014)では、「…の調査/統計/考えでは」のような情報源を表す「では」が<抛り所>として「空間次元のデ格」に位置づけられている。しかし、本稿では情報源を表すのは「では」であり、同じ名詞にデだけが付いたものは「場所のデ」と解釈されると考えるため、ここでは取り上げていない。

には波線を、属性次元のデ格には破線を付している<sup>4</sup>。

[1] 異なる次元に属するデ格同士は同一文内に共起できる((11)~(13))。ハによって階層の違いが明確化されたものは許容度が比較的高い((11)と(14)の対比)。

- (11) アメリカではオイルショックでディーゼル乗用車が売れ出した。  
[空間<場所>+モノ・コト<原因>]
- (12) 法律案は十三日の衆議院本会議で賛成多数で可決され、参議院に送付されまし  
た。 [空間<場所>+属性<様態/資格>]
- (13) 大名たちが、火事装束で早馬で門を走り抜けていった。  
[属性<様態>+モノ・コト<手段>]
- (14) 車はジョスリン通りとトレメイン通りの交差点で赤信号で停止した。  
[空間<場所>+モノ・コト<原因>]

[2] 同じ次元に属するデ格は、ハによって階層の違いが明確化された場合や、読点・ポーズによって付け加えの意図が示された場合を除き、同一文内には共起できない。なお、アンケート調査の結果では、上記(9)よりも(10)の方が許容度が低かった。

- (15) ロッキード問題をめぐる大変な疑獄、汚職がはやっている中で、福島県で知事  
が逮捕された。 [空間<状況>+空間<場所>]
- (16) 関係省庁の話し合いの過程では、通産省と外務省との間で、こんなやりとりが  
繰り返された。 [空間<時間>+空間<場所>]

[3] 属性次元のデ格は副詞性が強いため、他の次元のデ格のみならず、それ自身も同一文内に容易に共起する。

- (17) 中に白装束で重力のない足どりでやってくる宮廷のバラモン階級の僧侶ペダン  
ダたちと、暖かいまなざしの老人である村… [属性<様態>+属性<様態>]
- (18) 彼女は困り切った表情で、小声で尋ねた。 [属性<様態>+属性<様態>]

[4] 「ハによる階層の明確化」「読点による引き離し」「2つのデ格の隣接」「デ格名詞句の3つ以上の多重共起」の順に許容度が下がる。よって、デ格は意味格であるが、その重複には表層的な制約が存在すると考えられる。

<sup>4</sup> (11)~(18)はすべて孟(2014)で示されているものである。

本稿は、「〇〇で検索のデ」をデ格の中に位置付けることを目的としたものである。そのため、孟(2014)が示す現象を細かく検討することはしないが、少なくとも、ハの後接や、読点・ポーズによる引き離しがなく状態で「〇〇で検索のデ」と「手段のデ」が同一文内に問題なく共起できるなら、両者は同じデ格ではないということは言えそうである。

実際に、「〇〇で検索のデ」と「手段のデ」を共起させた例を以下に示す。

(19) ネットで「明石 買取」で検索して評判がよさそうなお店がこちらのお店でした。  
(<https://www.fk-jrc.com/voice?paged=9>)

(20) 「毎日音楽」でスマホで検索してみてくださいね。  
([https://www.mbs1179.com/oshio/c\\_diary/2015/10/](https://www.mbs1179.com/oshio/c_diary/2015/10/))

これらはハによる階層の明確化や読点による引き離しがなく、かつ、「〇〇で検索のデ」と「手段のデ」が隣接した例であるが、いずれも問題なく許容される文である。

以上から、「〇〇で検索のデ」を「手段のデ」に位置付けることはできない。

#### 4. 条件によって範囲を限定するデ

本節では、次のようなデと「〇〇で検索のデ」の関係について考察を行っていく。

(21) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」で検索する。

(21)は条件を指定して(既定の条件にチェックマークを入れて)データベースを検索するような場合として解釈されたい。ここでは(21)のようなデを、便宜的に、「条件のデ」と呼んでおく。

「〇〇で検索のデ」と「条件のデ」には次のような共通点と相違点がある。用例は「〇〇で検索のデ」を先、「条件のデ」を後の順で示している。

[共通点①]: 「検索(する)」と共起する

(22) 名刺の裏に「華麗に集客で検索」と入れてありますし、

(23) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」で検索する。

[共通点②]: 「手段のデ」と同一文内に共起できる

(24) 「毎日音楽」でスマホで検索してみてくださいね。

(25) 専用アプリで「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」で検索する。

[相違点①]: 述部が「検索(する)」(および「検索(する)」の意味で用いられる「調べる」)に限定されない

(26) お会いした人にも口頭で「華麗に集客で {検索して／調べて／\*探して} ください」とお伝えできるものです。

(27) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」で {検索する／調べる／探す}。

[相違点②]：デを引用助詞トと置き換えられない

(28) 名刺の裏に「華麗に集客 {で／と} 検索」と入れてありますし、…

(29) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」{で／\*と} 検索する。

以下、2つの相違点について考えていく。

「条件のデ」は、例えば [相違点①] に示した(27)において、資料が分類されている書架などを想定すれば、「探す」といった動詞とも共起することが可能である。「検索(する)」と「調べる」「探す」は後者が前者を包含する関係にある。このことは以下のような例からも明らかである。

(30)a. 「検索」という「調べ方」

b.\* 「調べ方」という「検索」

(31)a. 「検索」という「探し方」

b.\* 「探し方」という「検索」

よって、述語の意味という観点から見た場合、「○○で検索のデ」は「条件のデ」の下位に位置付けられると考えられる。

この捉え方を軸に考えていくと、「○○で検索のデ」が引用助詞トと置き換えられるという特徴が何を示すものであるのかについても明らかとなる。まず、「○○で検索のデ」と「条件のデ」は同一文内において重複できる<sup>5</sup>だけでなく、名詞を並立の形で列記して一つのデ格名詞として示すことも可能である。

(32) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」で「震災に関する訴訟」で 検索する。

(33) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外、キーワードを「震災に関する訴訟」」で検索する。

(33)では、「条件のデ」に合わせる形で、「震災に関する訴訟」という裸の名詞句相当のものではなく「キーワードを「震災に関する訴訟」」をデ格名詞としているが、(34)に示す

<sup>5</sup> 「○○で検索のデ」と「条件のデ」は同一文内において重複できることが何を意味するのかについては 5 節で述べる。



ように、「キーワードを」の部分がない形、つまり、「〇〇で検索のデ」に合わせた形でも文は成立するため、やはり「〇〇で検索のデ」と「条件のデ」は、名詞を並立の形で列記して一つのデ格名詞として示すことも可能であると考えられる<sup>6</sup>。

(34) 「2000 年、東京、号外、「震災に関する訴訟」で検索する。

(35)~(37)と(38)(39)の対比が示すように、名詞を並立の形で列記して一つのデ格名詞として示すことができるのは名詞の意味役割が完全に一致する場合のみである。

(35) このイベントは [東京、大阪] で開催される。[空間<場所>+空間<場所>]

(36) [ノミ、カンナ] で木材を削っていく。

[モノ・コト<手段>+モノ・コト<手段>]

(37) 中に [白装束、重力のない足どり] でやってくる宮廷のバラモン階級の僧侶ペダンダたちと、暖かいまなざしの老人である村…

[属性<様態>+属性<様態>]

(38)\* [関係省庁の話し合いの過程、通産省と外務省との間] で、こんなやりとりが繰り返された。 [空間<時間>+空間<場所>]

(39)\* [列車事故、バス] で振り替え輸送を行った。

[モノ・コト<原因>+モノ・コト<手段>]

したがって、「〇〇で検索のデ」と「条件のデ」は同じカテゴリーに属するデであると考え  
る必要がある。

では、なぜ同じカテゴリーに属するデの中に引用助詞トと置き換えられるものと置き換  
えられないモノが存在するのか。

藤田(2000)は、引用助詞トは発話・思考(行為としてのコトバ)の再現を行うものであるが、  
言語の在り方を考えた場合、「モノとしてのコトバを引く引用」を認める必要があるとする。  
「モノとしてのコトバを引く引用」には「痕跡の引用」と「言語材の引用」があり、前者  
は「…に～とある」「…では～と言われている」といった構文を、後者は「～と名付ける」  
「～と命名する」「～と呼んでいる」などの述語を取るといふ。(3)(4)に示した「検索(する)」

<sup>6</sup> (33)のような例を含め「条件のデ」はコピュラの連用形として捉えられる可能性もある。例えば(33)を  
(i)のようにするとそのような解釈がかなり強くなる。

(i) 「発行年が 2000 年、発行社が東京、朝夕刊が号外、キーワードが「震災に関する訴訟」で検索する。

しかしその一方で、条件が単項の場合には「発行年が」が許容されなくなったり、(34)のように「発行年  
{を/が}」の部分がない場合にはコピュラの連用形は捉えにくくなったりするなど、現象は複雑である。

(ii) 「発行年 {を/\*が} 2000 年」で検索する。

(iii) 「2000 年、号外、「震災に関する訴訟」」で検索する。(=(34))

デを格助詞と捉えるかコピュラの連用形と捉えるかは、デを考えるうえで重要な問題ではあるが、本稿ではこの問題には立ち入らず、今後の課題としたい。

と共に起すともこの「モノとしてのコトバ」(文字列)を引いていると考えてよいだろう。

一方、「〇〇で検索のデ」は「条件のデ」と同じ機能を有しているはずであるため、「引用する」ということを主たる機能とするのではなく、「検索(する)」「調べる」「探す」などの動作が及ぶ範囲(インターネット上のスペースや、資料が分類されている書架など)を、デ格名詞が示す条件によって限定することを主たる機能としていると考えなければならぬ。つまり、「条件のデ」は「検索(する)」「調べる」「探す」などの動作が及ぶ範囲を限定する条件を示す名詞を取るが、述語が「検索(する)」の場合は、その語彙的な意味によって、その条件に「文字列」を取ることができるため、引用助詞との置き換えが可能となるのである。

以上から、「〇〇で検索のデ」は「条件のデ」の一部に位置付けることができるが、本稿では、「〇〇で検索のデ」を含む「条件のデ」はそれだけで一つの用法とするのではなく、従来の研究が言うところの「範囲のデ」の中に位置付けられると見る。

従来の研究で「範囲のデ」とされてきたものは、次のようなものである。

- (40) 俳句で「雲の峰」といふのも此の入道雲です。 (木村 1997)  
(41) 彼はこのクラスで一番背が高いです。 (森山 2008)  
(42) 富士山は日本で一番高い山です。 (岡 2013)

これらは「述語の成り立つ範囲に制限を加える(木村 1997)」と規定されるものである。これらの多くは範囲そのものを表す場所名詞がデ格名詞として現れるが、「条件のデ」では範囲を限定する条件が現れる<sup>7</sup>。このような違いはあるものの、「範囲のデ」を上記のように規定するならば、デ格名詞が示す条件によって「検索(する)」「調べる」「探す」などの動作が及ぶ範囲を限定する「条件のデ」も「範囲のデ」の中に位置付けられると考えられる。

## 5. デ格の用法内における「範囲のデ」の位置

前節にて、「〇〇で検索のデ」が「条件のデ」、さらには、「範囲のデ」の中に位置付けられることを見た。本節では、ここまでの議論を踏まえて、「〇〇で検索のデ」を含む「範囲のデ」のデ格の用法内における位置について論じていく。

石川(2017)はデ格の用法を並列的に捉えているが、孟(2014)は二次的用法を認めており、「範囲のデ」を「場所のデ」の下位に位置付けている。「範囲のデ」を「場所のデ」と関連付けて考えることに本稿も首肯するものであるが、ここで問題となるのが、同一文内での重複を許さない「場所のデ」と、重複が問題なく起こる「範囲のデ」を同じように捉えて

<sup>7</sup> 従来の研究の多くが「範囲のデ」を「場所のデ」との関係で捉えようとしている。本稿も同様の立場であるが、両者のつながりが明確なのは(42)のように場所性の高い名詞がデ格名詞に立つ場合であり、(40)のような場所性が低い例では、本稿の言う条件に近くなると考える。

よいかという点である。

本稿では、デ格の体系を表 2 のように位置付けることで上記の問題を解決できると考える。なお、表 2 中の矢印は「時空間系」(「場所のデ」)と「範囲系」(「範囲のデ」)が連続的であることを示している<sup>8</sup>。

表 2 デ格の暫定的な体系

	格助詞的 (同一文内重複不可)	副詞的 (同一文内重複可)
空間次元	A. 時空間系 ←→ E. 範囲系	
モノ・コト次元	B. 手段系、C. 因果系	
属性次元		D. 付帯状況系

孟(2014)は、上述のように、「[3] 属性次元のデ格は副詞性が強いため、他の次元のデ格のみならず、それ自身も同一文内に容易に共起する」としている。しかし、同様のことは、孟(2014)が「場所のデ」の下位に位置付けている「範囲のデ」も可能である。

- (43) 彼はこのクラスの中で男子で一番背が高い。 [範囲+範囲]  
 (44) 「発行年を 2000 年、発行社を東京、朝夕刊を号外」で「震災に関する訴訟」で検索する。 [範囲+範囲]

また、孟(2014)は、「[2] 同じ次元に属するデ格は、ハによって階層の違いが明確化された場合や、読点・ポーズによって付け加えの意図が示された場合を除き、同一文内には共起できない」とも述べているが、同じ空間次元に位置付けられる「場所のデ」と「範囲のデ」も同一文内に共起可能である。

- (45) 日本で仕事で一番になった。 [空間<場所>+範囲]  
 (46) 図書館で「広報つくば」で検索してみてください。 [空間<場所>+範囲]

以上の現象は、「付帯状況系」(孟(2014)の言う〈様態〉)に加え、「範囲のデ」も副詞的な性質を持っていると捉えることで説明できると考えられる。

以上、本節では、「○○で検索のデ」を含む「条件のデ」に関するこれまでの議論を踏まえて、デ格の用法内における「範囲のデ」の位置について論じ、デ格の暫定的な体系を示した。

<sup>8</sup> 本稿の目的は「○○で検索のデ」(ならびに「条件のデ」)をデ格の用法内に位置付けることであるため、いわゆる「時のデ」「期間のデ」については触れていないが、両者の関係についても、多くの先行研究同様、連続的に捉えられると考えている。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、引用助詞トと置き換えられるという特徴を持つ「〇〇で検索」におけるデのデ格の用法における位置付けについて議論を行ってきた。本稿の主張は以下のとおりである。

- ・「〇〇で検索」におけるデは、引用助詞トと置き換えられるという他のデにはない特徴を持つが、これは「検索(する)」などが表す動作が及ぶ範囲を限定する条件が「モノとしてのコトバ」である場合にトとの置き換えが可能となるだけのことであり、このタイプのデは「条件による範囲の限定」を行うものとして従来の研究が言うところの「範囲のデ」の中に位置付けられる。
- ・「〇〇で検索」のデを含む「範囲のデ」は、多くの先行研究が指摘しているように、「場所のデ」とのつながりで捉えられるものであるが、副詞的な性質が強くなっているため、同一文内に複数生起することができる。

5 節では、「範囲のデ」のデ格の用法内における位置と併せて本稿での議論を踏まえたデ格の暫定的な体系を示したが、これには多くの課題が残されている。まず、石川(2017)の言う「対比系」や、石川(2017)に立項のないいわゆる「動作主のデ」については、体系内に含まれていない。また、注 6 で少し触れたが、デを考えるうえで、当該のデが格助詞なのかコピュラの連用形なのかは大きな問題であるが、これについても本稿では論じることができなかった。このような点については今後の課題としたい。

### 参照文献

- 芦野文武・伊藤達也 (2019) 「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション』51: 105-124, 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会.
- 石川慎一郎 (2017) 「現代日本語における「デ」格の意味役割の再考—コーパス頻度調査に基づく用法記述の精緻化と認知的意味拡張モデルの検証—」『計量国語学』31 (2): 99-115, 計量国語学会.
- 岡智之 (2005) 「場所的存在論によるデ格の統一的説明」『日語日文学研究』53: 235-254, 韓国日語日文学会.
- 岡智之 (2013) 『場所の言語学』ひつじ書房.
- 木村睦子 (1997) 『国立国語研究所報告 113 日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂.
- 菅井三実 (1997) 「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究』127: 23-40, 名古屋大学.
- 杉本武 (2013) 「原因の「～で」と「～ことで」について」『文藝言語研究 言語篇』63: 37-52, 筑

波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.

日本語記述文法研究会 (編) (2009)『現代日本語文法 2 第 3 部 格と構文 第 4 部 ヴォイス』  
くろしお出版.

盤若洋子 (2015)「格助詞「で」の研究—深層格と包括的意味機能—」拓殖大学大学院言語教育  
研究科言語教育学専攻博士論文.

藤田保幸 (2000)『国語引用構文の研究』和泉書院.

丸山直子 (2015)「コーパスにおける格助詞の使用実態—BCCWJ・CSJ にみる分布—」『計量国  
語学』30 (3): 127-145, 計量国語学会.

丸山直子 (2016)「格助詞「に」と「で」の深層格—出現状況把握に向けての問題点の整理—」  
『日本文学』112: 175-194, 東京女子大学.

孟会君 (2014)「事象の構造から見る二重デ格構文の発生」『第 6 回コーパス日本語学ワークシ  
ョップ予稿集』1-10, 国立国語研究所.

森山新 (2004)「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』  
4: 66-76, 日本認知言語学会.

森山新 (2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』ひつじ書房.

森山新・冉愛玲 (2008)「日本語母語話者と中韓日本語学習者の持つ格助詞デのカテゴリー構造  
比較」『お茶の水女子大学人文科学研究』4: 53-66, お茶の水女子大学.

矢澤真人 (2007)「日本語情態修飾関係の研究」筑波大学博士論文.

(安祥希 筑波大学非常勤講師)

# Positioning of “○○ *de kensaku*” in the Usage Classification of the Case Particle “de”

AHN Sanghee

This paper aims to examine "de" in the phrase "search by ○○" and analyze its position within the usage of the case particle "de." The "de" in "search by ○○" has a feature not found in other usage of particle "de"—that is, it can be replaced by the quotation particle "to." This is possible when the condition that limits the range of actions, which is represented by a predicate such as "to search," is strings. Based on these considerations, the paper concludes that this type of "de" can be positioned as a "limitation of the range by conditions" within the "de" that represents "the range," which has been explored in previous studies.